ホモ・サピエンス

椎 名　利（化工会）

現在、世界には全部で一九三種のサルと類人猿がいる。その一九二種は、体が毛でおおわれている。例外なのは自称ホモ・サピエンスと称する裸のサルである。この奇妙な、そして高度に繁栄した種は、たくさんの時間を彼らの高尚な行動契機の探索に費やす一方、彼の基本的な行動契機を故意に無視するのにおなじくらいの時間を費やしている。かれは、霊長類中最大の脳をもつことを誇っているが、彼のペニスもまた最大であることはかくしたがる。

（ Ｄ・モリス『裸のサル』日高敏隆訳）

（一）

『メスの乳房の肥大は、普通、性的というよりむしろ母親的な発達だと考えられている。しかし、この考え方を支持する根拠はほとんと見当たらない。他の種の霊長類も、子供に十分な乳を供給できるが、彼らは明瞭に区分できる半球形の乳房のふくらみをもっていない。その点、われわれのメスはユニークである。この特徴ある形を持った突出た乳房は、進化の過程で創り上げられた一つの性信号の例だと思われる。このことは……』

ドアーがノックされる音で、書きかけた原稿のモニターから目を離し入口に目をやると、吉野が顔を覗かせた。

「先生、来週からお出掛けだと伺っていましたので、原稿を頂きに参りました」

いつものように、がっしりとした体を折るように、一礼するとソファーに腰を下ろした。

篠崎は、日焼けした吉野の顔にちらりと目をやると、用意してあった原稿を彼の前に置いた。妻の美樹と大学同期で、出版社のＫ社に勤める吉野は、担当者として原稿を受け取りにしばしば現れた。

「来週は、ブリッジの地区大会があり、また美樹さんとペアーを組んで出場しますので、よろしくお願いします」

吉野は、褐色のつやのある首筋に手を当て、骨太な体格をすくめるようにして頭を下げると、男性には不似合いな細い鼻梁の顔を篠崎に向けた。

「来週は、Ｄ大に講義に出掛けるから…」

共通の話題を持たない篠崎と吉野は、仕事以外の話はあまり弾まない。それに東北出身の篠崎は、この都会育ちの吉野になにか引け目を感じている。第一体格だが、バタフライの選

手だったという彼は、一七五センチあるがっちりした筋肉質の日焼けした体躯で、やせぎすの篠崎とは違い、男っぽさを漂わせていた。その上、何気ない服装にも都会的なセンスが現れている。

今日もフリルの付いたファッショナブルのシャツにベージュのジャケットを着ている。多分 *ISSEY・ MIYAKE* のものだろう。

そのような引け目はどこかに現れるのだろうか、それを察してか吉野も、今出版されている篠崎の本の反響など事務的な話を済ませると、原稿を鞄に収め早々に立ち上がった。

再びコンピュータに向かった篠崎が、インターネットに接続すると、メールの到着を告げるサインがついている。

メールボックスを開くと、Ｄ大春川教授の助手耀子のメールが現れた。

『篠崎先生　公開講座の件

来週、予定されている公開講座のプレリリース、次のようにしました。

演題は、『オスとメスはなぜあるのか？』

少壮の進化生物学者、Ｐ大篠崎助教授が語る「性の不思議」。時間は、二時間ずつ二回の予定です。

当日は、公開講座なので学生、一般の参加者を含め二百名程度の出席者が見込まれています。ＯＨＰ・スライドも用意 してあります。よろしくお願いします。以上教授からの伝言です。

しばらくお目にかかっていませんが、シカゴでの学会は大変盛況で、先生の発表は多くの注目を集めたと伺っております。久しぶりにお目にかかれることを楽しみにしています。耀子』

メールを読み終えた篠崎は、耀子の痕跡を慎重に消すと、来週の講義の準備を始めた。

（二）

「なぜ、オスとメスがあるのかは生物学の難問です。未だに皆を納得させうる答えは見つかっていません。生殖だけを考えれば、無性生殖のほうがはるかに効率的だからです。

そうですね。有性生殖の場合は、メスしか子供を生めない。つまり子供を生めるのは、半分なのです。

ですから、劣性が淘汰される進化論の理屈からすると、なぜこんな効率の悪い有性生殖が許されているのかわからない」と、いつもの講義の時のように、よく通る張りのある声で話している篠崎の顔を、耀子は見つめながらスライドの合図をする彼の目線を追っていた。

彼は、進化生物学の若手としてマスコミにも注目されていた。万物の霊長たる人間の行動・営みを、進化の視点から分析すると、意外に本質めいたものが見えてくる。人間の行動原理を解き明かし、企業運営の仕組みを合理的に築き上げるのを目的とするマネージメント学を筆頭に、多くの社会科学者の注目を集めていた。

ほぼ満員の会場は、それらの聴衆に占められていたが、公開講座なので若い女性もかなり多く会場を華やかに彩っていた。

今日は、生物学科の主任教授、春川も弟子を満足げに見つめながら、彼の話しに耳を傾けている。

「有性生殖の最大の問題点は、性にコストがかかることです。つまり、ふさわしい配偶者を見つけるのに時間・資源を消費するのですね。オスは青年期になると好ましい相手を見つけるのに夢中になり、見つけるとそれを繋ぎ止めておくために多大な努力を払わざるをえないのです。ですからたいていのオスは、メスを惹きつけるため大変に美しい。孔雀などはこのもっとも良い例ですが…」

目玉模様の羽を広げた孔雀が、スクリーン一杯に映し出された。

（きれいなオスか） 耀子は、篠崎に目を向けながら笑いをかみしめる。彼は、今日もベージュのアルマーニのスーツに、花柄のネクタイをしている。よく似合っている。これも美樹の選択に違いない。ぐっと視線を上げると、広い額の真ん中のホクロが目立つ。男性にしては色白で紅すぎる薄い唇は、冷たい感じを抱かせるものの、学者らしい怜悧さを漂わせている。一七〇センチはある背をピンと伸ばし、教室に絶えず視線を走らせ聞き手の反応を確かめながら講義する姿が女性に人気があるのも頷ける。

彼の話しは、動物のオス・メスを話題にしているものの、人間の男女関係をも容易に連想させるため、会場は、終始笑い声に満たされ和やかな雰囲気で進行していた。

「多くの動物では、シカの角や、孔雀の羽のようにオスだけが奇妙な進化を遂げているケースが多いのです。このような目立つ形態が、生存に有利なわけはないのです。なぜなら、目立つオスは外敵の攻撃を受けやすいからです」

しんとした聴衆が、先を促した。

「しかし、とにかくメスが望みさえすれば、生存にとって不利な形態でも進化してしまうのですね。なぜ優秀でもないオスがたくさん生きのびているのか、という問いに対する一つの答えがここにあるのです」

彼は、ことさら理屈っぽく動物の求愛を語っている。

例えば、オスに選択権のない鳥の世界では、メスは、餌や家をプレゼントするオスの行為から優れた子孫を残せそうなオスを選ぶ。

篠崎はこのオスの行動を、『婚姻贈呈』と語り、

「餌を多く集められるオスがもてるのは、当然としても、さて立派な餌を集められない鳥はどうするのでしょうか。手を咥えて見ているのでしょうか？」

ハンカチを額に軽く当てた篠崎は、用意されていた水を一口飲むと教室をゆっくりと見回し、

「そうではないのですね。そこがすごいのですが……、餌にみえるものを持って、メスのところに行くのです。するとメスが、『なにかな？』と、思って突っつきまわしている間にエッチしてしまう」

どっと、会場は笑いの渦に巻き込まれた。

（三）

「少し、ふざけすぎましたかね」

春川は、感想を求める篠崎の言葉を聞きながら、

「いやよかったよ。わしが言うといやらしく聞こえるが、君が話すと、ユーモアに聞こえる。若さだよ。結構々」

今夜も、一人娘、美樹の夫である篠崎と話していると、春川は、自然に寛いだ気分になれた。

（少し体重が増えたかな）との心配が心をかすめたが、好きなキャンティー・ワインのグラスを手にしていた。

春川は、自分の想い出話などを、熱心に聞いてくれるこの婿と助手の耀子と食事していると、いつも青春に戻れて楽しかった。妻や美樹がいると

「また、その話……」と、まぜっかえされてしまう。

今夜も、想い出がすっかり彼を若がえらせていた。

春川は、自分の研究室の後継者として六年のアメリカ留学から帰った篠崎を、助教授として推薦した。

春川は、三〇歳の若さでＰ大の助教授の椅子を獲得し、今や、マスコミの寵児でまもなく教授の椅子が予約されている篠崎を眺めながら、この弟子を育てたのは私だ、との思いに満足していた。

また、美樹と篠崎の結婚は、彼をひどく喜ばせていた。

「ところでどうかね、美樹の主婦ぶりは」

春川は、ナフキンを口に当てながら問いかけた。

美樹と、篠崎が結婚したのは、美樹がマスターコースを終えた年の秋だったから、もう二年になる。

美樹は文学部だがしばしば父親の研究室を訪れていた。それは修士課程として篠崎の指導を受けている耀子と気が合うらしかった。耀子は、この春川研究室を卒業すると結婚したが、二年で離婚し再入学し修士課程を学んでいた。その結婚歴が美樹にとっては、耀子を人生の先輩、姉と感じさせるのに充分だった。

美樹は小柄ではあるが、ふくよかな健康的肢体でかわいらしかった。

美樹は、しばしば訪れてきて、三人でよく食事などを共にしていたが、二人を並べてみると対照的だった。つまり、はちきれそうな若さを発散させる無邪気な育ちのよいお嬢さんといった美樹に対して、スリムな耀子は胸など小ぶりだが、その肢体からはすでに女の性の萌芽が見られた。

当時、三十を過ぎていた篠崎は、二人を眩しげに見ていたが、耀子は彼の結婚対象になりうるものの美樹とは年も違い、しかも、恩師の娘である彼女を結婚の対象とは考えられなかった。しかし、学部長から春川の意向を伝え聞くに及び、年齢差に最後までこだわったものの、美樹が修士課程を終えた秋、みなの祝福のうちに結婚した。

「おとうさん、美樹は料理が好きでしょう。それに、にぎやかなのが好きだから、学生たちが遊びに来て、ブリッジパーティをよくします。このところ、すっかりカードの腕もあがったようでトーナメントにも参加して、今回も久しぶりに一緒にと言っていたのですが、なにか大事な試合があるとかで……」

篠崎が言いわけめいた言葉を口にすると、耀子が、

「彼女と、一度お手合わせしたいわ。もうかなりの腕前で、わたしなど寄せつけないかしら」

春川は、二人の弟子たちを相手に珍しくワインに酔っていた。

「今日は、若い女性も多いのでびっくりしたよ。あのような話、若い人には抵抗なく受け入れられる。まるで皮肉っている意味がわからない顔している。性に対する考え方の違いだね。我々は、『愛のないセックスはいけない』と教えられたけど、最近の若い連中は、『セックスと愛は別』とか『セックスがあって愛が生まれる』なんて言うのだからな。わたしなど、母さんしか知らない。モラルなんて時代で変わっていくものだから、古い道徳に縛られていた我々は損をしたというわけか」など、普段はあまり口にしない感想を語っていた。

春川が、ふと時計に目をやると、ちょうど九時だった。

「今日は、楽しかった。お先失礼するよ」

ゆっくりと立ちあがった春川は、少し外股で肩を振る足取りで、車に乗った。

春川が家に着くと、妻の晶子は、テレビドラマを見ていた。

「明晩は、京料理でも食べに行こう」

今夜の彼は、なにか楽しげだ。髪は、すっかり薄くなってしまったが、人生の卒業生とされるには、いささか抵抗を感じていた。

「お風呂、わいていますよ」

晶子は、テレビから目を離そうともしない。

風呂から出た春川は、なにか彼女に声をかけようと側に坐ったが、テレビを熱心に見つめる晶子に気おされ、先に寝室に行くとベッドに横になり、今日の講演会の様子を思い出していた。

春川は、学生、サラリーマン、企業経営者と多彩で、女性も意外に多かったのを思い返し、今回の人間の恋愛行動と動物の生態を重ねてみる企画が、当を得ていたのに満足感を覚えると、自分と晶子の平穏無事な結婚生活が、なぜか腹ただしく思われた。

ワインの酔いで、少しうとうとしたのだろうか。

ふと気がつくと、晶子が枕もとのスタンドを消そうと手を伸ばしている。前かがみのため大きく開いた晶子のネグレジェの胸元から、意外に白い乳房が見えた。

春川は、なぜかすっかり興奮し、晶子を抱き寄せると、

「いやですよ。急に、どうしたのですか……」

逃れる仕種をみせた晶子も、春川の手が乳房に触れると、明かりを消し、春川の腕に身を委ねた。

春川は、暗くなると意外にも積極的な晶子に、戸惑い、圧倒されて果てた。

久々の満足感から眠りに落ちてゆく春川に、どこからともなく声が聞こえてきた。

『生物学的に人間と動物の最もおおきな違いは、人間には、発情期というものがないのです。つまり動物は、発情期を過ぎると交尾は出来ません。それに比べて人間は、いつでも相手さえいれば、性行為が可能なのです。これは、人間は子育てに長い時間かかるため、メスだけで育てるのが困難で、オスとの分業体制を必要とするわけです。そのためには長い間、ツガイを形成する必要があります。そこで、なにかつなぎとめておくためのご褒美を、与える必要があるのです』

（四）

「このマリネ、おいしい」

美樹が、吉野のほうにアンチパスタの皿をよせた。

この店の壁に書かれたテンペラ画の街は、フィレンツェだろうか、サンタ・マリア・デル・フィオーレと思われる赤い屋根が見える。いかにも地中海風なインテリアのこのレストランは、先日も週刊誌に紹介されるような店だが、七時という夕食時なのに客はまばらだ。週の始めだからだろうか。

「キングのシングルトンか。全くついてなかった」

吉野はワインを飲みながら、相変わらず先ほどのゲームの場面を思い出しながら呟いている。

「なにをいつまでも言っているの。配られるカードは、確率の問題だからしかたがないわ。いつまでもつまらない愚痴を言っていないで、食べなさいよ」

吉野は、カードとなるといつもこだわる自分を、もてあましていた。彼のキングのシングルトンを見透かすように、いきなりエースで勝負に出てきた相手の読みに屈し、その劣勢をついに挽回できず吉野と美樹のペアーは、一回戦であっさり負けてしまった。

吉野のブリッジ暦は、高校時代にさかのぼる。

正式には、コントラクト・ブリッジと呼ばれるこの競技は、四人で行われるが、向かい合った、二組のペアーの間で争われる。

各々のペアーは、ビッドとレスポンスを通じて自分たちの持ち札の情報交換を行い、取りうる数を予測し宣言する。麻雀に比較すると偶然性が少なく、テクニックが優先する競技だ。

つまり、麻雀より賭博性が少なく、合理性に富み、イギリスでは上流階級の遊びとされているのが、吉野の自尊心を満足させていた。

大学に入学すると、ブリッジクラブに入部した。

一年後、入部した美樹を、本格的なプレーヤーに育てたのは、自分だと吉野は自負していた。

彼は、ブリッジの原書を手に入れると、ノートをとりながら読んだ。クラブでゼミに使うテキストは、ほとんどが彼の選択したものだった。

そのくせ吉野は、法学部の授業には熱心でなかった。都会育ちの吉野は、女性たちの扱いに慣れ、女性たちの関心を集めていた。

アルバイトの水泳教室でのインストラクターとしての吉野は、ママたちの注目の的だった。

海水パンツの彼は、逞しい泳ぎを見せた。特にバタフライは動作が大きく、力強く水をかく両腕があげる水飛沫の中に、躍動する褐色の上半身を見せていた。

ある種の鳥は、『アリーナ』と呼ばれるオスがディスプレイを競い合う場所を持っている。彼らは美しい羽を競い合い、時には争う。メスたちはと言えばこれをじっと眺めて、オスたちの品定めをする。

プールは、まさに『アリーナ』だった。

吉野は、彼女たちの評価に耐えた、逞しい『美しいオス』だった。

この彼女たちは、体格のわりには、シャイな吉野の性格をすぐ見抜くと、決して彼に選択権を行使させず、また彼は一方的な彼女たちの誘いを断れなかった。

事実、多くの女性に付き合うには、資金が潤沢とはいえない彼にとって、彼女たちとの食事は楽しく経済的にもプラスであった。

『成熟したメスたち』は、たちまち関係をエスカレートさせ、吉野もすぐにその誘いに便乗する狡猾さを身に着けていった。

それは、すべて彼女たちに任せ、何も知らない坊やを演出すればよかった。

『男性は、能動的であらねばならぬ』と、いうプライドは少し傷つけられたものの、補ってあまりある、甘美な世界が彼の前に拡がった。

彼は、授業をサボったが、賢明にも彼女たちとの恋愛感情に溺れはしなかった。

しかし、このような事柄が、吉野に受身の男性観を創り上げていった。

二年生になり、美樹たちと知りあい、彼女たちから一般教養課程のノートを借りて、試験に臨むようになってから、結構、要領よく単位を獲得する術を覚えたが、一年生のときに落とした単位すべては補いきれず、三年になるとき留年し美樹たちと同期になっていた。

吉野は、彼の愚痴を上の空で聞く美樹に、

「篠崎先生の本、売れるので、担当の僕もおかげさまで大きな顔させてもらえるよ。美樹、ゲラの校正ぐらい手伝っているのだろ」

「ばかね。わたし、彼の本にあまり興味ないの」

「でも君は、国文専攻だし…。卒論は『今昔物語』だったよね。校正の手伝もしないで、家で何しているの。退屈しない。でも稼ぎのいい先生の奥様だから幸せか」

「嫌みたらしいこと、いわないでよ。あなたも早く奥さん貰いなさい。年上の女性とばかり遊ぶのはいいかげんにして」

「稼ぎが悪いから、いつも振られてばかりで駄目さ。もっとも、美樹に振られたのがけちのつけ初めだけどね」

美樹と吉野の仲は、入学以来すでに、六年になっているが、もっとも親密だったのは四年生のときだった。美樹は、学校の帰りに誘われるままに彼のアパートに寄った。週刊誌などが乱雑に積まれた部屋は何となく汗臭さかったが、二人だけになれるのがうれしいのか彼女は、部屋に入ると勝手にコップをだし、自分でワインを注いだりしていた。

吉野は、年上の女たちから仕入れた週刊誌的話題を、あたかも自分の体験談のように話した。巧みな話術と落ちは、美樹をいつも楽しませているようにみえた。

そんな美樹を見るとき、吉野は幸福だった。

そして、その幸福感が、彼女がしばしば浮かべる軽蔑の笑みを見落とさせた。

吉野は、キスしか許してくれない美樹を学者の家庭のせいだと考え、『好ましいオスだ』との彼の自信は美樹の気持ちを推しはかろうとはしなかった。

吉野は、エスプレッソを飲む美樹を見ながら、

「今夜はどうする。彼、京都だろ」

「そう、でも、今夜は早く帰るわ」

吉野は、なにもいう間もなく立ち上がった美樹が表情もあらわにしたまま、振り返りもせず私鉄のターミナルに向かう後姿を、未練がましい目つきで追った。

（今日は、なにもかもついてない。当然、今夜は美樹が付合ってくれると思っていたのに）

手帳を出すと適当に探した女性の電話を廻すと、

「ピーと言う音が流れたら、ご用件をお話し下さい」との、留守電のメッセージに一層腹を立てた

今夜は帰ろうと、電車に乗ると無性に腹が立ち、忌々しい昔の出来事まで思い出されていた。

おれの就職が内定した夜、二人とも少々酔っ払って、おれの部屋で、いつものようにキスをしていた。

その夜、美樹は、ジャケットを脱ぐと、乳房がシルキーなブラウスを押し上げていた。彼女はいつになく烈しく応えてくれる。躊躇しながらも、

（今日は大丈夫だろうか？）と、ブラウスのボタンに手をやると、少し酔ってみえた美樹は、突然躰を起こすと、

「だめよ。結婚前の女性にそんなことしては…」

おれを軽く突き放した美樹は、立ち上がると、冷蔵庫のジュースを注ぎながら、

「パパが言っていたわ。哺乳類のメスで処女膜があるのは人間ぐらいなのですって。これは、初めてのメスの試みに困難や苦痛を与え、ブレーキをかけ、最後のステップに踏み込む前に、相手を冷静に見つめ、考えさせるためにあるのだそうよ。今、わたし、考えているの…」

夫のいない一人のアパートは、あじけなかった。こんなに簡単に試合に負けるなら、いっそ、一緒に京都に行くのだったと美樹は、後悔していた。

それに今日は、吉野が、いつになく集中力を欠いていた。どうも、試合の後のわたしとのデートばかり考えていたのではないかと思える。

（キスを許すと、男ってすぐ、調子にのるから嫌ね…）

美樹は、入学したときから吉野のカードのとき見せる集中力や原書を取り寄せながら学ぶ姿勢を好ましく思ったが、しばらくすると、カード以外には全く無関心で、すべて場当たり的な彼の態度に戸惑いを感じ始めていた。さりとて、吉野の発散するオスとしての魅力から自由にはなれなかった。

周りから入ってくる吉野のよからぬ噂を聞いた美樹は、聞き耳を立てながらも、ある時耀子に

「でも、カードの腕前を見ていると、頭が悪いとは思えないし、そんなにだらしないとも…」

微笑を浮かべた耀子は、

「『碁知恵に、そうめん腹』って、知っている」

美樹が、「なに……」と、いうように首をかしげると耀子は、

「碁が上手いからと言って、頭がいいとは限らないのは、そうめんでお腹が一杯になったからと言って、お腹が一杯になったわけではないのと同じだというの。そうめんだけでは、すぐお腹すくものね」

耀子の言葉は、美樹を彼との恋愛感情から解き放ち、以後、『親密なボーイフレンド』として付き合っていた。

結婚してから一年ぐらい経ったある日、吉野は出張中の篠崎の原稿を受け取るため、美樹のもとを訪れた。原稿を受け取ると彼は、すばやく目を通しながら、笑みを浮かべると、

「ここ読んでみない」

美樹が、渡された原稿を見ると、

『体内受精の動物は、すべて、父性の確認が容易ではない。卵を自分の体内に持つメスは、どの精子により受精しようが、自分の子供であるのに変わりないが、オスには分かりようがない。従って家族を養うために大きな経済的な負担をするオスは、配偶者防衛を行なうのは当然です。十九世紀のフランスの法律は、『姦通という行為自体はけっして悪ではないが、

父性の不明な子供を家庭にもたらすのが悪なのだ』と、述べています。具体的な防衛策は、文明度により異なるが、一番極端な例は、アフリカの一部の部族で行なわれている女子の性器を縫合する女子の割礼ですが、文明社会では、『純潔』『貞節』などの道徳的規範を設け、社会通念として防衛しようとしているわけです。一見男女の不平等の代表例に上げられる『姦通罪』もこのような生物学的事実をふまえたもので、単純に男性の横暴とだけ…』

「どうだい？　貞淑なマダム」

美樹は、通念に支配されているとは考えてなかったが、自分の倫理観も、所詮、社会的刷り込み現象かと思うと腹立たしかった。

ふとあげた美樹の視線を吉野が捉えると、吉野は美樹を抱き寄せ、キスすると、黙ってブラウスのボタンに手をかけた。

一匹のオスとしての吉野は、若く、逞しく申し分なかった。

（五）

公開講座の二日目は昨日にもまして女性が多くなったように思われた。多分華やかな服装の女性が増えたように思われた。

耀子は、篠崎の講義を聞きながら、彼と初めて結ばれた当時を思い出していた。

彼のマスターコースでの講義は、いつも淡々としていて、『染色体』、『ゲノム』、『減数分裂』などの専門用語が遠慮なく飛び交い、公開講座のようなジョークもない。このような教壇での篠崎を見ていると、とても二人のときの篠崎を想像できない。今も、今夜のことを思うと躰が火照るのを感じ、一人で顔を赤らめた。

篠崎が、Ｐ大の助教授として迎えられたのは、耀子が離婚し再度マスターコースに入学したときだった。生物学、特に動物の進化に興味を持っていた耀子は、この春木研究室を選んだ。助教授就任早々の篠崎が卒論の指導教官だった。新任の彼の生徒は耀子だけだった。

耀子の彼に対する初めの印象は、若いわりには額が広く、髪の毛が柔らかいせいか、薄く感じられた。額の真ん中にあるホクロと、絵も描くという彼の指は、細く長く、手を真っ直ぐに伸ばすとしなやかに反り返り、その華奢な体が中宮寺の弥勒菩薩を連想させた。幾分冷たく見える篠崎は、気鋭な学者らしく耀子には好ましく感じられた。

耀子は、修士コースでの二年間、篠崎の指導の下に過ごしたが、篠崎は耀子と二人だけで過ごすのを避け、会食するときはいつも美樹と三人だった。

多分、留学時のアメリカでのセクハラ騒ぎを見ていたに違いないので、女子学生とのスキャンダルの種にされるのを怖れた篠崎が、意識的にしていたのに違いない。

兄を二人持つ耀子は、兄たちの会話で男性が意外に照れやで、関心を寄せている女性にはわざと無関心を装い、冗談ぽい話の中に、本音を言っている様子を耳にしていたので、篠崎の無関心さにも、耀子を意識しているのをはっきり感じられる時がしばしばあった。

耀子は、美樹の結婚の話を聞いたときも、春川研究室の後継者である篠崎が、恩師のお嬢さんと結ばれるのを、「ハッピーエンドの恋愛小説みたい」と祝福した。

卒業後、耀子は関西に戻ったが、定年後京都のＤ大に移籍した春川に請われるままに彼の助手を勤め、大学に近いところにアパートを借りていた。

京都に来たときの篠崎は、以前とは違い耀子とも、二人で気安く夕食などをしていた。

篠崎が結婚して一年ぐらい経ったときだったろうか。

その宵、春川教授の家でごちそうになった帰り道、耀子は、

「近くだからよっていく？」と篠崎に声をかけると、一人住まいにしては贅沢な広さのアパートに篠崎を案内した。シンプルな装飾の部屋には、黒皮の柔らかいクッションのソファーと、大理石のテーブルがおかれている。

時間が早かったので、耀子は、ワインをあけ、篠崎に薦めると、春川の前では遠慮していた彼女も、グラスを手にした。

寛いだ篠崎は、いつも講義の時見せる背筋を伸ばし、胸を張る姿勢もとらず耀子をリラックスさせた。

その夜の彼は、耀子の話にあいづちをうちながら微笑み、ワインをうまそうに味わいながら、自分の生い立ちを初めて語った。

東北の田舎町役場で出納係を勤める家庭の長男として育てられた篠崎は、小さいときか少しシャイで引っ込み思案のところはあるものの、成績は抜群で両親の自慢の種でいうならば立志出世伝中の人物であったのだろう。しかも、大学教授のお嬢さんとの結婚は、篠崎の自尊心を満足させているかに思われた。

しかも、美樹との結婚生活が安定してくると、関西では耀子とも二人での食事のチャンスが増えたが、臆病な彼の性格からすると、二人の仲は親しい友人以上には発展することはなかった。

篠崎は、研究室ではいつも白衣の耀子を見ていたが、彼女のドレスアップした姿に、あらためて目を向けたようだった。美樹に比べると、背は幾分高い程度なのだが、やせぎすの彼女は美樹より高く見える。ストレートな髪が細い首をくるむようにして肩までかかっている。時々顔にかかる髪をかき上げると切れ長の目を篠崎に向ける。ピンクの唇がワイングラスにふれる。

今夜の耀子は、白いスリップドレスにシホンの柔らかいブラウスをガウンのように羽織っている。

淡い大きな花柄が白い肌に映え、深く切れ込んだ胸元が乳房の存在を意識させ、ときどき見せる白い歯が、きれいに縁どられた唇を際立たせていた。

篠崎は、ふと最近読んだイギリス学会誌の報文を思い出していた。

『四つ足で歩くサルのメスは、背後から接近するオスに尻を見せ、性的信号を送り発情期を知らせるが、直立して歩く我々の種は、社会的な活動においても、対面した生活が多くなり、前面になんらかの信号を発する性的擬態を作る必要があった。口の周りのはっきりと区切られた紅い唇は、まぎれもなく陰唇のコピーに違いない。また半円形に突き出した乳房は、肉質の尻の擬態で…』

篠崎のヒトとしての意識は、ここで途絶えた。

立ち上がろうとしてよろめいたメスを、膝の上に抱き留めたオスは、すでに確認していた信号に従い忠実に行動を起こした。

オスは、意外なほど弾力あるメスの肉体に接すると、身を起こそうとしたメスを抱きしめ、唇を接触させると、感受性の高い口の粘膜質を刺激した。さらに、オスが半円形のシンボルを捉えると、メスはわずかに声を上げたが、オスのその行為を受容していた。

（六）

篠崎は、東京での耀子とのデートには慎重だったが、ここ関西では自由だった。

今夜は、神戸まで遠征しトアロードのレストランで食事をしていると、耀子が

「美樹のカードのパートナー、相変わらず吉野くん？」

「彼とのときが多いみたいだね」

耀子は、昔聞いた二人の噂を思い出すと、浅黒く焼けた筋肉質の、『美しいオス』を思いだした。

（今はどんな関係なのだろう？）と、ふと微笑んだ。

「春川先生と一緒だといつもワインだからな」

今夜は、彼は好きなバーボンを飲んでいる。

篠崎は、今夜は、明るい黄色の濃淡のゆったりとしたパンツルックで、カーディガンネックのジャケットを着た耀子を見つめながら、細いウエストにしっかりと造形されたベッドでの耀子の躰を思い浮かべていた。

今夜の彼女は、なにか疲れている様子で、食後のリキュールを飲み干すと、

「ちょっとお化粧を直してくるわ」

奥に向かいしばらくして戻った耀子は、篠崎の耳に顔を寄せ、

「ごめんなさい。わたしだめになってしまったの。一週間も早いのですもの。ごめんなさいね、今夜は、わるいけど帰らせて」

すまなそうに、彼の肩に手をかけ、首を少しかしげた耀子は、目で帰りを促した。

京都に戻り耀子と別れて篠崎は、独りでチェックインしたが、なにか彼女にはぐらかされたようで部屋に入っても落着かず、耀子と一緒には決して行かない最上階のラウンジに出掛けた。

東山側の一面ガラスの窓から、五重塔が見える。高い天井からはカットガラスのシャンデリアが淡く光り、ピアノがゆっくりとしたルンバを奏でていた。あまり広くないフロアーでは、二組のカップルが凭れ戯れるように踊っていた。なかに、黒のぴったりとしたワンピースに白いシースルーのシャツジャケットで踊っている女性はなぜか美樹を連想させた。

それは、小柄なシルエットが似ているよう思われた。心なしかアンフィニの匂いが漂ってくる。身を預けた彼女は、抱かれるようにして踊っている。

美樹でないのは分かっていたがなにか落着かず、二杯目を飲み終えると部屋のキーをとると立ち上がった。

部屋でバスにつかっていると、隣の部屋に人が入って来るけはいがする。なぜか先ほどのカップルではないかと思った。すっかり酔った篠崎は、バスから出てベッドに横たわると、すぐに寝入ってしまった。

いつの間にか、篠崎は、再びラウンジに戻っていた。シャンデリアのわずかな明かりのもとで、カクテルドレスの女性とタキシード姿の男性は、ワルツを踊っている。

その女性の横顔を見たとき、彼ははっとした。小柄なわりには豊かな躰、アップに上げられ頭の上で束ねられた髪型は、まぎれもなく美樹だった。

そのカップルは近づいてきても、彼に全く気づいた様子もなかった。ライトがだんだん暗くなってゆくと、美樹は引き寄せられ、二人は暗いホールの中央で一体になっていた。

やがて、美樹は、抱えられるように、廊下に消えた。

篠崎は夢中で後を追ったが、見失い、あきらめて自分のフロアーにたどり着くと、そのカップルが部屋に入るところが見えた。それは、自分の部屋の隣に思えた。彼は後を追うと、躊躇なくドアーを開けた。

部屋は、真っ暗でなにもみえない。

彼はたまらず、「美樹」と叫ぶと、目が覚めた。

カーテンを通して、初夏の早い朝の光がほのかにさし込んでいた。

起き上がった篠崎は、夢が気になり、朝食を済ませるとすぐ新幹線に乗り、昼過ぎには自宅に帰った。

彼は、（どうしたの）と言いたげな美樹とならんでソファーに坐ると、昨夜の夢を話した。

篠崎の話しを聞き終えた美樹は、眉をひそめ、

「まあこわい。実はわたしも同じような夢を見たの」

美樹は、昨夜は珍しく早く床についたためか、夜半に目を覚ますと寝付かれず、ワインをのみ再び寝たが、断片的な夢を見た。

わたしは、あなたからの迎えだという若い男の車に乗せられホテルに着くと、ホールでは数組の男女が踊っていた。わたしは、あなたが間もなく見えますと聞き、その男と踊っていたが、会場の照明が暗くなるとわたしは抱きすくめられ、ホールから連れ出されると、無理やり暗い部屋に連れ込まれた。

わたしが、彼から逃れようと烈しく抵抗していると、突然ドアーが開けられ、明るくなったと思ったらあなたが入ってきた。

「あなた……」と声をかけたら目が覚めた。

「同じ夢を見るなんて不思議ね」

美樹は、まるで今、悪夢から助け出されて安心したみたいに、篠崎の首に腕を廻すと、烈しく唇を求めた。

篠崎は久しぶりに妻の躰に触れると、欲望を押さえきれず、一週間の禁欲のためかあっさり果ててしまった。

静かに美樹の胸に身を伏す夫に美樹が、もう一度腕を絡ませると、二人は再び陶酔の深みに落ちていった。

（七）

最終回の会場は、カラフルな女性の服装で、華やいでいた。

篠崎は、皆の反応を確かめながら話を進めている。

階段教室は、人の視線が重ならないため、多くの観衆を意識できて、篠崎は好きだった。

時計をみると、もうあまり時間がなかった。

「さて最終回の今日は、霊長類たる我々の種の特徴について、触れぬわけにはいきません。我々の種は、集団で狩りをします。メスたちを残して狩に出るオスは、メスたちの貞操を信じなければなりません。それに組織的な行動を維持するためには、性的にも平等である必要

があります。つまり、一夫多妻みたいな専制を許していては団結が保てません。このような過程から発達したのが一夫一妻制です。この種の性行動の特徴は、異常に長い求愛期間、つがう前の行為と…」

真夏の太陽が､容赦なく強い陽射しをレースのカーテンに投げかける｡昼下がりとは言え、まだ陽は高い。

この隔離されたプライベートな空間で、日焼けした肌のオスは、メスの乳房と乳首に異常に関心を示し、ここに唇を添えると入念に愛撫した。このつがう前の行為で、メスの乳首の長径は０．５センチ、乳房は２５％ほど増加し、ますます丸みをおびた。この性的刺激に興奮し、劇的変化を見せたオスのペニスが、メスに挿入されると、メスの心拍数は、一気に１４０に達し、一時１２０台に落ちたが、二分後には１５０を記録し、三分後には両者とも１６０を記録して終わった。

オスの性的緊張感は直ちに、解放されたが、メスは、この種族だけが示す烈しい性的充足感にしたっていた。

メスのこの充足感こそ、事後にすぐ立ち上がると種が失われるので、それを防ぐため、裸のサルが進化の過程で備えたユニークな生理的仕組みだった。

オスは、肌かけから覗く円形の性的シンボルに、そっと手をやった。

大きくはずむ円形のシンボル。

「さて、時間も迫っていますので、最後に、もう一つ例を挙げて終わりにします。サルの世界には、二つの生活パターンがあります。周知のように、一夫多妻型と乱交型の社会です。ゴリラは前者に属し、チンパンジーは乱交型の社会を作っています。ゴリラは、多くのメスを防衛するためにオスの体重は、メスの三倍近くあります。つまり、体重の大きいものほど強く、多くのメスを持っています。それではチンパンジーはどうでしょうか。チンパンジーは、オスもメスもあまり体重の差はありません。しかし、このデータを見てください」

篠崎が目で、耀子に次のスライドを促した。

「これは、各々の精巣の重さを比較したものです。ゴリラは３５グラム、チンパンジーは１２０グラムで、体重に対する割合はゴリラが０．０２％、チンパンジーはゴリラの１５倍、０．３％もあるのです。これは、乱交社会では、交尾回数を多くし、たくさんの精子を送り込むのが、競争に打ち勝唯一の方法だからなのです。さて、それでは人間はどうなのでしょうか」

篠崎は、満員の会場に視線をはしらせその視線をしっかり受け止めると、マイクを近づけた。

「人間の精巣は、個人差がありますが、約５０グラム、体重に対する割合が０．０８％です。人間社会は一夫一妻制ですが、生理的にはどちらかといえばチンパンジーに近いようです」

美樹は、吉野の唇を軽くかむと、

「この間、彼、京都から帰ると、わたしたちを夢で見たと言うの、ほんとにびっくりしたわ。でも、卒論のとき読んだ今昔物語の『同じ夢を見た話』を思い出して、とっさに、わたしも同じ夢を見たことにしたの」

美樹は、かみころした笑みを吉野に向け、褐色の分厚い胸に顔を寄せると、

「彼ね、こう言うのよ。『互いに愛しあっていたから、同じ夢を見たのだね。やはり、チンパンジーと人間では違うのだ』ですって…」

（参考文献）

＊Ｄ・モリス：「裸のサル」日高敏隆訳 河出書房新社

＊長谷川真理子：「オスとメス＝性の不思議」講談社

＊青土社*:「imago* 特集 恋愛の生物学」 *Vol4-13′ 93*

2012-10-23 改定